

# 不登校を主訴とし精神科クリニックの外来を受診した児童、 思春期患者の臨床的特徴

平川 清人<sup>1)</sup> 西村 良二<sup>1)</sup> 白石 潔<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>福岡大学医学部精神医学教室

<sup>2)</sup>心のクリニック飯塚

**要旨：**近年不登校の子どもは増加傾向にあり，社会的にも大きな関心が向けられている．今回筆者らは不登校の子どもに関してどのような臨床的特徴を有しているかを把握するために調査を行なった．2001年4月1日から2003年9月30日の2年6ヵ月の期間に，心のクリニック飯塚子どもセンター外来を初診した2歳から20歳までの子どもは491名であった．そのうち6歳から18歳までの児童青年で，主訴として不登校の問題をあげている子ども148名を対象とし，診断に関してはICD-10を用いて調査を行ない，次のような結果を得た．1. 不登校を主訴とし受診したものは全初診者の30%であった．2. 前思春期から思春期にかけて急増する傾向がみられた．3. 受診経路として学校からの紹介が最も多かった．4. 疾患別では神経症圏内が多く，次いで気分障害であった．5. 抑うつ感や不安感などの症状を多く認め，身体症状としては睡眠障害が最も多く，次いで腹痛，嘔吐などの消化器症状であった．6. 治療方法として受容的／支持的精神療法が85%と最も多く，薬物療法は46%であった．7. 治療期間は1～3ヵ月未満が最も多く，転帰として治癒42%，軽快34%，不変／増悪21%であった．8. 再登校が36%，不登校26%，不明31%であった．

索引用語：児童思春期精神医学，外来患者，不登校